月刊剣道日本　2003 年 1 月号

新・八段の修行⑨　平野宣昭（ひらのよしあき）教士　抜粋

「剣遣いには大きく二つの勝口があります。一つは先制攻撃をかけ、敵をすくませて勝つ殺人刀、そしてもう一つが活人剣です。師の著書に表現を借りれば、『敵の働きに随って無理なく転変して勝つ刀法』です。大切なポイントはいくつかあります。目付二星もそうですし、三見大事、拍子、嶺谷之事などもそうです。しかし、それにもまして重要なこと、根底を成すもの、それはやはり心法です。活人剣は平たく言えば、敵をこちらに引っぱって斬りかからせ、それを迎えて胆で刀を振り上げ、上太刀となって斬り下ろす、となります。技はいろいろあります。しかし、いうなればそれは結果です。敵に随って勝つわけですから当然のことです。ところが一つだけ変わらないものがある。心法です。敵をこちらに引っぱって、という部分がそれです。捧心という教えがあります。文字どおり捧げる心です。さらに三箇捧という具体的なものもあります。つまり敵に我が身を捧げ、そうしてこちらに引っぱり込むわけです。三箇捧の『三』とは、危ないと思う心、打ちたい心、防ぎ守ろうとする心、この三つです。これを敵に捧げるのです。しかし決して（頭を下げる格好をしながら）こうするのではありません。体はあくまでも自然体です。その無形の位で心を捧げるのです。無形の位とは、こちらから能動的に何かをしようというのではなく、何にでも応じられる位といえば解るでしょうか。

新陰流では、懸、待、表、裡をすべて蔵する位といい、『直立つる身』とも称しています。捧げる心でもう一つ大切なのは敵の太刀を一カ所に迎えることです。いくら敵に自由に斬らせるとはいえ、どこにくるか分からない状態では危険です。そこで、“ 先 ”の気を強くし、こちらが主導権を握った状態にいることが求められます。無形の位で捧げ、しかし主導権はとり、敵を引っ張り込んで一カ所を斬らせ、上太刀となってまっすぐ我が人中路を斬り通す。活人剣のポイントをつなげればこういうことになります。人中路とは体（心）の中心線です。敵と正対して自分の人中路を斬り通せば、すなわち敵の体（心）の中心をまっすぐ斬っていることになります。さらに言えば、斬り通した形は、それがすでに無形の位で、そこから再び敵の働きに随って活人剣が展開されていきます。敵が斬りかかってくる限り、それはどこまでも続きます。つまり無形とは無数の形、無限の形を秘めたものといってもいいかもしれません。それにしても、心法はもちろんだが、刀法も深くて難しい。心身学道！もっともっと錬りあげ、鍛えあげなくてはなりません。」（略）

「相手との引っぱり合い、すなわち活人剣の竹刀剣道への応用を考えるなら、捧心、三箇捧をクリアしなければいけません。しかしこの心は意識しているうちはできない。捧げよう、捧げようと思うと捧げられないのです。捧げようと思わず、相手にはこちらの捧げる心が伝わっていた。これでなければいけません。つまり、ここまで錬るのです。これは肚です。肚を錬るわけです。強靱な肚の力なのです。気の力といってもいいでしょう。」

上太刀となり、我が人中路に斬り通す

「現在の私の剣道は引っぱり合いはできても、相手を引き込む前に反応してしまうことがまだまだ多いといえます。結局、相手に引っぱられているのです。無形の位に直立って“ 先 ”をもって相手を迎え、映るまま無意識の打ちを出す。『正念を

相続できる肚』『先を純粋に持続できる肚』を鍛え錬りあげて、いつかはそんな打ちを出してみたいものです」

「わたしは禅を少しばかりやっているものですから、何かに付け『死』とか『安心』、あるいは『親切を尽くす』といったことに思念がいってしまいます。私が修行する柳生新陰流についてもそうです。『死』を眼前において精妙な技は成立しています。『死』は人間にとって避けるべくもない。しかしその『死』を『生』の中にクリアし、『安心』、すなわち平安へ自己を導く。ここに新陰流の哲理があると私は思うのです。それゆえ技の精妙さが際立つのではないでしょうか。新陰流に限らず、正伝の古流はみな同じはずです。『自分の死』を賭けての技であり修行なのです。つまりてき面の『自分の死』を乗り越えてはじめて成立する剣技なのです。柳生新陰流の活人剣、これは相手に充分に働かせ、相手が勝ったと思うところに勝ちを得る剣です。『死』と背中合わせの『生』の剣というべきでしょう。それだけにその剣の理に対する絶対的信頼もあるわけです。」

「小川先生と柳生先生の後進に接する姿勢を見て感じたことです。『親切』とは仏門の『衆生無辺誓願度』すなわち先度侘の発菩提心のことです。解りやすくいえば、相手の真の幸せを正しく願うことです。相手の次の段階を先見して、ここというところで包みこむように厳しく当たり、引っぱりあげるのですが、そのに他の意はまったくありません。ひたすら『親切』を尽くすだけです。柳生先生は稽古でとくに厳しく正しく私の身心を打ってくださいます。『不打不成機』なのです。名工が銘刀を創作する以上の鍛え錬りがなくして『正伝』はあり得ないのです。そこには大いなる慈悲の心に根ざした『大親切心』があるばかりなのです。『この世の日本で正師の直下に参じて打成預ける』まさに至福！道悦至極とはこのことであります。石段に例えていうと、私が一段目にいます。両先生は数十段も上にいらっしゃいます。石段を一段登るごとに景色は大きく変わります。先生は上から二段目まで下りてきて『二段目の景色はいいぞ、ほら登って見なさい』としきりに励ましてくださいます。そんな図、これが『親切を尽くす』ことなのです」